地域密着ケア「3密」越えて

高齢者とつながり模索

新型コロナウイルスの影響で、高齢者らのケアに地域密着で取り組む福祉団体の活動が壁にぶつかっている。外出自粛や「3密」の回避で、交流拠点での集いは軒並み中止。顔を合わせ、つながることを大切にする活動理念が根本から覆された形だ。逆境をはね返そうと、様々な工夫を凝らした試みも始まっている。

「すずの家」を訪れた女性にパック詰めしたいなりずしと太巻きを手渡す鈴木恵子さん(右)。距離を意識しつつ、暮らしぶりも尋ねる=川崎市

集い休み食事配布・Zoomで認知症カフェ・全国の試み共有

「きょうはおいなりさんと太巻きですよ。何も困ってることはない?」

川崎市の住宅街にある2階建ての一軒家。自宅から歩いてきた80代の女性に、パック詰めの食事を手渡しながら近況を尋ねる。女性は「ここに来るのが楽しみなの」と笑顔を見せた。

宮前区の野川地区で活動するNPO法人「すずの会」は4月から、原則毎週土曜日に、調理した食事を地域の高齢者に取りに来てもらう取り組みを進めた。

2月までは空き家を活用した交流拠点「すずの家」で、孤立防止や介護予防のための集いを週2回開いていた。一人暮らしのお年寄りら十数人がボランティアと昼ご飯を食べ、わいわいと過ごす。だが新型コロナの影響で、別の施設で開くミニデイサービスとともに休止に追い込まれた。

その後も利用者らに電話をかけて近況を尋ねていた理事長の鈴木恵子さん(73)らは、4月に入って外出自粛の長期化が確実になると、集まらずにつながりを保つ手段として食事の配布を決めた。

筋力低下を防ぐ狙いも込めて、食事は歩いて取りに来てもらう。毎回約30食を作るが、あらかじめ電話で来てほしい時刻を伝えて重ならないように気を配る。来なかった人には家まで食事を届けて生活状況を確認する――。「20年以上、地域密着でやってきたからこそ声をかけ合える」と鈴木さん。緊急事態宣言の解除を受けて今月3日、密集を避け、消毒や換気を徹底しながら「すずの家」での集いを再開した。

■これまでに取り組まれた工夫の例

箕面市社会福祉協議会(大阪府)
見守りを兼ねた高齢者への昼食の配達に100人以上が申し込み。配達はアルバイトができなくなった若者らが仕事として担い、若者支援も兼ねた取り組みに

小勝山団地自治会(千葉県市原市)
女性会のメンバーが手作りしたマスクを公園で配布。3回の配布で計約730枚を延べ223人に配り、受け取りに来なかった人に声かけを進めた

女川町社会福祉協議会(宮城県)
生活支援コーディネーターが町を巡る移動販売車に同行し、買い物に出てきた地域住民と会話しながら、生活の様子を把握しようと試みた

NPO法人地域支え合いネット(長野県駒ケ根市)
住民が講師となり、介護予防を目的に運営する講座「まちかど大学」の休止を受け、YouTubeを活用して講座の動画配信を開始。けん玉で体を動かしたり、折り紙を作ったりする内容をアップしている